

本書は藤井徳行先生が多年にわたって、近代日本政治史研究で果たされた多大なご功績を讃え、ともに、定年ご退職の記念事業の一環として、先生とご縁の深い方々、とりわけ日本法政学会に集う研究者が法学、政治学、歴史学の分野にわたって、現代日本の民主主義をその淵源から現状、さらには二一世紀への展望を視野にまとめた総合的研究の成果である。

日本法政学会は、法学、政治学のみならず、隣接の諸学問や現実の政策形成や福祉、教育などの領域にも対象を広げ、総合科学的学会として発展している。それゆえ、本書は多様な内容となっている。

第I部「前近代・近代日本の民主主義の潮流」では、近代日本の民主主義確立の過程を自由民権運動家の法貴発から、第一回兵庫県議会議員選挙、さらに第一回総選挙を通じて論じている。ほかに前近代における西本願寺末寺と朝廷権威にかかわる論考、及び戦前期を代表する外交官重光葵についての論考を収録した。

第II部「現代日本の民主主義の課題」では、社会保障法における男女の差別を論じた論考と、児童期の性的虐待について論じた論考を収めた。ほかに貧困や格差問題など現代の資本主義を「相対化」する賀川豊彦の労働運動論と、賀川に師事した政治家北村徳太郎の政治思想の現代的意義を説いた論考を収録した。

第III部「二一世紀の政治学・法学の展望」では、憲法二三条をめぐる新しい解釈の動向に関する論文、またオンプズマン制度の来歴からその望ましいあり方を提示する論文を収めた。ほかに新破産法に関する論考と、世襲議

員をめぐって憲法学的視点から選挙と世襲制度を考察した論文を収めた。

以上、本書に収められた論考は執筆者それぞれの専門領域からではあるが、これを全体として見れば、すでに述べた日本法政学会の特色である総合科学的性格がよく反映されているように思われる。前近代から二一世紀という時間的広がりをもつ対象を扱っているものの「分析は細かく具体的に、結論は大きく一般的に、そして一書としてまとまりのあるものに」という基本姿勢は一貫しているつもりである。

最後に、法学・政治学の第一線で活躍する先生方より最新の研究成果をお寄せ下さったことに深甚の敬意を表するものである。また、本書の刊行でお世話になった法律文化社小西英央氏にも厚くお礼を申し上げたい。

藤井徳行先生の近代日本政治史研究のさらなる発展を念じ、本書が多くの研究者にとって必見の論集にならんとを願うものである。

平成二二年五月

藤井徳行先生ご退職記念論集実行委員会